

第四回 幸福師匠！お一えん会（報告）

令和 4 年 12 月 16 日（金）に岐阜市神田町の喫茶店星時で「登龍亭幸福・旭堂鱗林二人会」が開かれました。「第四回幸福さんお一えんかい」は 10 人のメンバーが参加しました。

○今回の演目は、登龍亭幸福師匠演じる「富久（とみきゅう）」でした。

深川あんじん町の裏長屋に住む幫間（たいこもち）の久蔵は、酒癖が悪くご最賃（ひいき）の旦那をしくじってばかりで、毎日ぶらぶらしていた。幫間は、現在の柳ヶ瀬界限にもお一人、お見えになるそう。年の暮で借金取りに追われる貧乏人の久蔵は、仕事にもありつけずに相変わらず引きこもっている。その久蔵のもとに相森神社で行われる富興行で富札売りをやっている友人が訪ねて来た。久蔵はなけなしの一分で最後の富札を買ってしまう。当たれば千両と言う。

「鶴の千五百番」の富札は神棚に納めて、「せめて二番富の五百両でも当たるように」と手を合わせるのでした。友人は「富札を持っていないとお金は貰えないよ」と忠告して帰っていった。久蔵は千両当たったら、ああする、こうすると、考えながら寝入ってしまう。

＊、幫間（たいこもち、ほうかん）は、宴席やお座敷などの酒席において主や客の機嫌をとり、自ら芸を見せ、さらに芸者・舞妓を助けて場を盛り上げる職業。

今年も「年末ジャンボ宝くじ」の時期になりましたね、果たして久蔵は千両を手に入れたのでしょうか。

あらすじ：★

その日の夜、半鐘の音に目を覚ました久蔵は、屋根に登った鳶の親方（火消し方のトップで消防署長のこと）から、芝の久保町の方が火事だと聞かされる。酒でしくじった旦那の家がある所だ。ここが忠義の見せ所と親方から背中を押され、この時とばかりと長屋を飛び出して行く。いち早く駆け付けければ出入りが許されるかもと馳せ参じる久蔵に「おお～!!!久蔵、浅草から駆けつけてくれたのか？えらい！出入りを許してやる！」。多々いる知り合いで久蔵だけが駆けつけたことに感激した旦那は出入りを許す。上手くいったもんだ。許されて荷運びの力仕事を手伝うが、ろくな手伝いもできないでいる。延焼は免れ、火事は消えて一安心。客の扱いに慣れた久蔵が見舞客の応対にあたる事になった。ご本家からの見舞いの酒を見て舌なめずりの久蔵。「飲んでいいぞ。だが、たんとは飲むなよ」との忠告にも、一度飲みだすとダメなのが久蔵。奥の蔵で美味しい酒と疲れから酔って寝込んでしまう。

また、半鐘が鳴り鳴り響き、旦那は久蔵を起す。今度は何処だと聞くと、久蔵の住まいのあんじん町だという。急いで戻った久蔵だったが、長屋は丸焼け。神棚に仕舞っておいた富札が無くては一文も貰えない。気落ちしたが「もし焼け出されたら戻って来い」と言ってくれた旦那の言葉を思い出し、とぼとぼと戻って行き居候となる。旦那の好意で元のお客さん回りを始めた暮れも近い日、歩いていると、ざわざわとした人の波に出くわす。今日が千両富の突き札の日だ。久蔵も富札を買ったことを思い出し、相森神社へ向かった。もしも千両当たったら、ああする、こうするのだと、捕らぬ狸の皮算用、めいめいが夢物語を喋っている。

「突き止めの千両～」の声で境内は静まり返り、突かれた札が読み上げられる。「鶴の千五百番～!!!」。夢物語は幻と消えた善男善女たちはぞろぞろと帰って行く。その中にへたり込んで震えている者がいる。久蔵だ。回りの人が心配して声を掛けると、千両富に当たって腰が抜けて立てないという。人々は久蔵をかつぎ上げ、やっかみ半分に社務所の前に放り出した。しかし、肝心の富札は火事で焼けてしまって無い。社務所には、札を売ってくれた友人が居た。売ってくれたのはお前だ、覚えているだろ！なんとかならないかと交渉する。半分の五百両、三百両、百両、十両・・・、一両と値下げだが、たとえ一文たりとも札がなければ話になるはずもなく、だから、「札が無いなら無理だと言っただろ!!!」と友人の言葉も荒い。



事情を知らない世間様からは「おめでとう、おめでとう」と言われた久蔵だが、火事で焼けちゃったことを思い出し、諦めて宛もなく歩きだした。千両富に当たりながらもらえないのなら、死んだ方がいいと境内を出たところで親方に呼び止められる。火事場から久蔵の布団と釜、それと合わせて神棚を運び出して家に置いてあるという。これを聞いて目の色が変わった久蔵は、親方の家へ一目散だ。布団なんかには目もくれず神棚の前へ。祈るような気持ちで扉を開けると、あったあった「鶴の千五百番」だ。無礼を親方に詫びて、いきさつを話すと、親方は「うまくやらあやがったなあ」「この暮れに千両、おめでたいな～、おい、久さん、どうするい」、びっくりするやら、羨ましいやらで、「千両どうするんだい!!!」。

「これも神様のお陰でございます。」「ご近所の溜まった借金のお払い(お祓い)をいたします」。

落語はここで落ちとなりますが、今のご時世、親方に半分の五百両をあげるのは無理でも、百両くらいは差し上げてもらいたいんじゃないかと思ったりします。今の日本も世知辛い、皆さんはどう思いますか。まずは、宝くじを買いましょうね!!!。

(落語の舞台を歩く、Web アドレス <http://www2.ttcn.ne.jp/ginjo/> を参照)

○旭堂鱗林さんの講談は、『鸚鵡籠中記 (おうむろうちゅうき)』でした。元禄の頃、尾張藩の尾張徳川家の家臣であった朝日文左衛門重章の日記です。実在の人物で、書き始めは元禄 4 年 6 月 13 日 (旧暦、1691 年 7 月 8 日)、書き終わりは享保 2 年 12 月 29 日 (旧暦、1718 年 1 月 30 日) で、実に期間 26 年 8 ヶ月、日数 8,863、冊数 37、字数 200 万に及ぶ膨大な日記を書き残しました。関ヶ原の合戦が終わって 100 年、元禄時代になり下級武士も脇差はただの飾りになっていた時代である。この頃の日常の記録として非常に貴重な資料とされているが、その内容は、本人の日々の記録や身辺雑記はもとより、当時の心中・盗難・殺人なども含む数々の事件や噂話なども記されている。鸚鵡返しのままに事象を記す、籠の鳥の如く不自由な身、と時代とわが身を揶揄したタイトルで、自由奔放な生き様を綴った日記は名古屋城の御蔵に封印され、公開がはばかられて来た。理由は、尾張藩への批判や醜聞が記載されていたためと考えられている。現在でも通じるエ

ピソードや風習描写が多く、「必殺シリーズの中村主水」の役所勤めを地で行くような人物であった様だ。今後は、鱗林師匠の続き物の講談としても楽しみである。

あらすじ：★尾張藩の下級武士の家に生まれた朝日重章（文左衛門）は、一応の武芸には励んでいた。槍・剣・柔・居合・鉄砲・弓など道場通いもしていて免許皆伝の腕前で有った。一方で、魚取り(魚殺生のこと)が大好きで自らサカナを捌いていたが、刑死した死体で試し切りに立ち合い、その後食事でまぐろの刺身が出されると「手ふるえて…舌も動かない状態」に陥ってしまう。暇と教養は有るが金は無しと言った下級武士であった。エリートには程遠いが武芸には精通していた文左衛門。突如、仇討ちの肩代わりの話しが舞い込んでくる。仇討ちなど滅相もないが、修羅場の事件となる。

(Wikipedia：『朝日文左衛門』、『鸚鵡籠中記』を参照)

○旭堂鱗林さんの藤井聡太シリーズ講談『藤井聡太の将棋一番勝負』では、今回は藤井五冠の「竜王」初防衛が話題となりました。第35期竜王戦7番勝負第6局において、藤井聡太竜王が広瀬章人八段に勝利し、見事「竜王」初防衛を達成しました。瀬戸の将棋好きファンの熱意が伝わって来ます。

○お弟子さん、登龍亭幸吉さんは『牛ほめ（うしほめ）』でした。一応、前座用の話となっているお話だそうで、難解な挨拶の文句をいちいち混ぜっ返す練習シーンや、メモを読みながら喋ったせいで、口でもぐもぐ言うのが見せ所とされています。

あらすじ：★いわゆる天然でぐうたらな与太郎を、父親は、こんな状態で大人になって大丈夫だろうかと悩んでた。父親にある考えが浮かんだ。与太郎の佐兵衛伯父さんが、家を新築したのでお祝いに行かせよう。普段バカにされてる与太郎でも、ちゃんとした大人の挨拶ができれば評価も一変するだろう。与太郎さんは、お父さんに呼ばれて、伯父さんの所に家見舞いに行くように言いつつあった。伯父さんの家に行く前に、父親から褒め方の文句を教わるのであった。

「(父) 伯父さん、この度は結構なご普請なさいました。」と丁寧な挨拶するんだよ、ちょっと言ってごらん。

「(父) 先日はおとつあんがご馳走になり、ありがとうございます。」「(与) 先日はおとつあんがご馳走になり、ご愁傷様です。」

「(父) 家は総体檜造りでございます。」「(与) 家は総体尻の気造りでございます。」

「(父) 天井は薩摩のウズラ木目でございます。」「(与) 天井は薩摩芋のウズラ豆でございませう」。。。。。

次はな、伯父さんが手塩に掛けて大切に飼っている牛がいるので、良い牛の見分け方を教えるな。それと台所の柱に穴が空いているから、そこではこう言うんだ。

「(父) この穴に秋葉様のお札をお張りになってはいかが。穴が隠れて火の用心になります。」どうだい。こう言えばきっとお小遣いの一つもくれるぞ。「(与) お金がもらえるの？だったらもっとほかになんない？」

「(父) 天角地眼一石二升八合」と言うんだ。意味は「角は天に向かい、眼は地をにらみ、首が鹿のように滑らかで、耳が小さくて、歯が互い違いになっている牛が良い」という事だ。今度は庭を観て褒めるんだよ、そしたらお小遣いを下さるからね。その次は、台所に行って褒めるのだが、大工が拙い仕事をしたので柱の上の方に節穴がある。隠す方法が分かったのでお前に教えよう。ここに書いておいたから覚えて行きなさい。「(与) 庭は総体ミカゲ造りでございますな。」「(佐) お前にそんな事が分かるのかい。でも庭はまだ見て貰っていませんよ。」「(与) 今度はこの牛褒めるから後ろを向け。天角地眼一黒？これなんて読む？いえ、何でもない。・・・何とかなの何とかだ。」「(佐) 誰かに教わってきたのだろうが伯父さんは嬉しいよ、お小遣い上げるからね。」「(与) あれ、この牛、馬糞したよ。」「(佐) まあまあ許せ。」「(与) 伯父さん、この牛(節)の穴について心配はいらないよ。」「(佐) 心配なんかしてないよ。」「(与) じゃ～台所に連れて行け。・・・大っきな台所だ。あったあった節穴が。」「(佐) お前にも分かるか。大工が拙い仕事をしてな。何とかならないかな、この節穴。」「(与) この穴は心配はいらないよ。秋葉様の火伏せの御札を張ってご覧なさい、穴が隠れて火(尻)の用心になります。」

＝ ＊、『火』と『尻』、『節穴』と『尻の穴』を引っ掛けた落ち。「秋葉様」とは、神仏習合の火防（ひよけ）・火伏せの神として広く信仰された秋葉権現で、お札は秋葉神社のお札である。（牛ほめ『落語散歩 70』を参照）

○「幸福さんお一えんかい」を「幸福師匠お一えん会」に改めます。

落語や講談といった日本の伝統話芸を楽しむため、岐阜東高等学校同窓会では、「幸福師匠お一えん会」を支援しております。岐阜市神田の喫茶店「星時（ほしどき）」で開かれている「二人会」にお邪魔をし、伝統話芸を広く伝えたいと応援しています。老若男女どなたでも参加でき、日本の伝統話芸の面白さや意味の深さを広く知る機会としております。

今回は来年3月11日土曜日7時から星時で開催されます。「幸福師匠お一えん会」ではまとめて席をお取りしておりますので、是非、生（なま）の落語・講談を聴きたいと思われる方はご連絡下さい。

幸福師匠お一えん会 代表 坂井至通（12期卒）

伊勢湾離島 日間賀島 初笑い寄席と海鮮グルメ旅

【初笑い寄席】
一 期：1月20日（金）20:00～21:00 登龍亭幸福（落語）・旭堂鱸林（漫才）・長良義孝（和楽器）
二 期：1月21日（土）11:00～12:00 開口一徹（落語）・登龍亭幸福（落語）・キビート（パフォーマンス）

旭堂鱸林と行くバスプラン

コース番号 66514-10 往復バス 1泊2食 船 寄席 一昨二部

出発日 令和5年1月20日（金）
旅行代金（お一人様）2～4名1室 21,500円（小学生1,500円引）
※宿泊は付いてお楽しみ。
集合 JR名古屋駅太閤通口（新幹線口）エスカ地下街 14:40集合/15:00出発
宿泊 日間賀島民宿（民宿まるより小浜荘、お泊りたかせなど同席クラス）※宿泊施設は出発10日前までに決まります。

現地集合 宿泊プラン

コース番号 66514-96 1泊2食 寄席 一昨二部

出発日 令和5年1月20日（金）
旅行代金（お一人様）2～4名1室 14,000円（小学生1,500円引）
旅行代金に含まれるもの：1朝1夕食・寄席

052-563-7500
（9:15～17:45 年末年始除く）
名古屋近郊旅行センター名古屋
〒461-0005 名古屋市中区東区13-1 NHK放送センタービル5F

一日講座 落語家 登龍亭 幸福 桂 竹千代 2023年1月期

二人会

芸どころ名古屋を支える落語家
登龍亭幸福さんと、古代史落語が話題の桂竹千代さん
の二人会。落語あり、対談ありの笑いの90分！

2/17（金） 2023年 18:30～20:00

【受講料】会員4,000円 一般4,500円
☆オンライン受講3,500円

受付はNHKビル7Fです
NHK加齢者名古屋教室
お申込・お問い合せはホームページ・窓口またはお電話で
〒461-0005 名古屋市中区東区13-1 NHK放送センタービル5F
052-952-7330

https://www.nhk-cul.co.jp/
NHK文化センター名古屋
【窓口・お電話受付時間】
月～金 9:30～18:00
土 9:30～17:00
日 9:30～15:00